

# 民俗・地誌部会の調査 ～富士塚公園と浅間神社

## 1. はじめに

民俗・地誌部会では、民俗を調査、記録し、その特徴と歴史を『新編立川市史』に編さんするために活動を進めています。民俗とは、生活の日常場面やハレの場面を、その移り変わりまでを含めたものをさしています。ここでは、令和2年（2020）4月に頒布が開始される『資料編 柴崎の民俗』に掲載予定の「富士塚」についての記述が、実際にどのような調査・解明の末に出来上がったのかを描くことによって、本部会の活動を解説したいと思います。



写真1 富士塚公園

## 2. フィールドワーク

民俗という対象を、教科書的に言い直せば、文字化されずに口頭で伝えられる慣習的な生活文化と言えます。その解明は、フィールドワークとライブラリーワークという異なる方法の調査を通じて進められます。

民俗のフィールドワークとは、対象とする地域社会に暮らす方々から聞き書きを行ったり、お祭りなどの行事に足を運び、その様子を記録する参与観察を行ったりするアプローチ法です。

民俗・地誌部会では、地域の調査を開始するにあたって、巡見を行い、聞き書き、<sup>さんよ</sup>参与観察を経て、調査資料の位置づけ、執筆を進めています。

富士塚と称されている富士見町一丁目の富士塚公園（写真1）にある<sup>せんげん</sup>浅間神社を対象とする、民俗のフィールドワークを紹介しましょう。なお、以下の紹介は、実際の調査経過に沿ったものではありませんが、わかりやすく、一部の内容や前後関係等をアレンジしていることをお断りしておきます。というのは、実際には、単独の調査者（部会員）とは限らず、複数の調査者の協働によって進めている面も少なくないからです。

【<sup>じゅんけん</sup>巡見】柴崎地区の最初期の調査は巡見という形で実施されました。住民の方（ここでは、市史編さん委員の鈴木功氏）の案内を得ながら、部会員が柴崎地区内をつぶさに実見しながら歩きました。その結果、富士見町一丁目の富士塚公園には、塚と称する小高い山があること、頂上部に神社があり、浅間神社と称していること、<sup>ほころ</sup>奉納額の記載から祠の上屋が昭和52年（1977）に改修されたものであること等を確認することができました。見て歩くことによって、住民の観点から地域社会の概観を捉えながら、民俗に関連する様々な情報やヒントを得ていくのです（写真2）。

【聞き書き】次に、特定地域やテーマに焦点を絞ってより多くの情報を得る目的で、聞き書きを実施しました。その一例として、富士見町一丁目の自治会の一つであ



写真2 巡見にて鈴木功氏の解説を受ける



る五月会の会長宅で実施した聞き書きにおいては、五月会の祭礼は8月の諏訪神社祭礼と11月の浅間神社の2回行われていること、いずれも、富士塚公園を拠点とすること、富士塚公園は、第二次世界大戦後、米軍駐留に伴う風紀の乱れから青少年を守るために、町会主導で児童会館を建てた場所であることや、富士塚公園が町会活動の拠点になっていることなど、地域社会に関わる具体的で多面的な情報を得ることができました。

【参与観察】 祭礼の実際を確認するために参与観察も実施しました。富士塚浅間神社では年に一度、11月23日に祭りが執り行われます。次はその祭りへの参与観察で確認できたことを見ていきましょう。

祭礼は五月会の役員の方々によって行われます。当日は朝から役員が境内に集まり、まず落ち葉の掃き掃除を行います。また、鳥居のシメナワに新しいシメを下げ、祭壇に三方を置き、ミカン、柿、リンゴ、サツマイモ、ニンジン、大根、ネギ、タマネギ、バナナ、お神酒などを供えます。

10時ごろから氏子総代の進行で祭儀を執行します。初めに総代が社殿に拝礼し、榊で参列者全員のお祓いを行います（写真3）。そして参列者が玉串を奉奠した後、お神酒を配って、総代の発声で乾杯をします。これらは拝礼、修祓※1、玉串奉奠※2、祝詞奏上※3、直会※4といった神道の式法と大差ないものでした。

富士塚浅間神社は諏訪神社の末社ではありますが、町会関係者が参列し、地元の氏子総代の手によって祭りが執り行われていることが分かります。

この神社については、西立川児童会館玄関ロビー内に掲示された「富士塚浅間神社の生い立ち」（昭和27年5月内野義蔵氏が記録。昭和63年5月に義蔵氏の依頼で大原太郎氏が揮毫）という資料が残されています。以下がその内容の要約になります。

戦前から富士塚の上にご神木が一本立っていたが、昭和二十三年秋の台風で倒れてしまった。古老の話に、明治時代から枯木のまま立っていたが、樹齢はわからないという。諏訪神社の宮司を訪ね、塚の上にお宮を建てたいので、倒れた古木を町会にいただけないかお願いしたところ、あの塚にはもと浅間神社があったので、責任をもって再建してくださるなら喜んで差し上げましょうと快諾された。さっそく町会有志で発起人を立て、建設を進め、昭和二十五年十一月十九日、富士見町西町会の守護神として浅間様を祀り込んだ。神社建設を機に、周辺を公園にする計画も持ち上がり、昭和二十七年に完成した。

上記の内容から、浅間神社の由緒とともに、行事の作法が町内会に伝えられていることが分かりました。五月会の前身である富士見町西町会には「浅間神社例大祭式次第」や「浅間神社祝詞奏上」（祝詞。平成15年12月吉日 大原太郎書 91歳）があり、これを元にした祭りが引き継がれ、執り行われて来たのです。



写真3 富士塚浅間神社祭礼

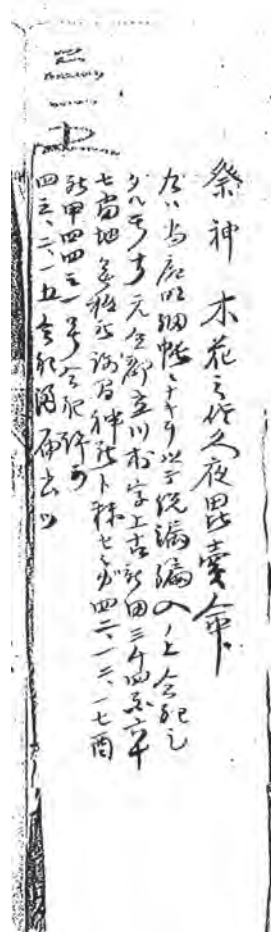


写真4 「神社明細帳」  
諏訪神社の項目の付箋  
(東京都公文書館蔵)

- ※1 修祓 お祓いをする事
- ※2 玉串奉奠 玉串（榊の葉に紙を付けたもの）を供えること
- ※3 祝詞奏上 祝詞（神様を称える言葉）を読み上げること
- ※4 直会 神事が終わったあと、お神酒などを頂く酒宴

### 3. ライブラリーワーク

フィールドワークと同様に重要な位置を占めるのがライブラリーワークです。これは文書や絵図など様々な歴史資料から、対象となる民俗の移り変わりなどを明らかにしようと試みるアプローチ法です。

例えば、昭和20年代まで国や県の神社台帳として利用された「神社明細帳」（東京都公文書館蔵）を見てみると、浅間神社の記載はありません。ですが、諏訪神社の項目の上に貼られた付箋（写真4）に、次のような記載があります。

#### 祭神 木花之佐久夜毘売命

右ハ当該明細帳ニナキヲ以テ脱漏編入ノ上合祀シタルモノナリ、元同郡立川村字上古新田三千四百六十七番地、無格社浅間神社ト称セシガ、四二・一二・一七酉社甲四四三一号合祀許可、四三・二・一五合祀後届出ツ

これによると、明治42年以前、柴崎村上古新田三四六七番地に無格社浅間神社があつて、<sup>このはな の さ く や ひめのみこと</sup>木花之佐久夜毘売命を祭神としていたこと、この神社は「神社明細帳」に記載されていなかったが、それを明治42年（1909）に諏訪神社に合祀したことがわかります（ただし、その後も塚や神木が残っていたことは、これまで見てきたとおりです）。このように、文書記録によって歴史が明らかになるのです。最も古い記録は、寛文7年（1667）「武蔵国多摩郡柴崎村御検地水帳写」に「ふし塚」とあるものでしょうか（保坂芳春著『立川の地名』、1988年）。

絵図や地図といった地理資料も重要な手掛かりになります。享和4年（1804）に描かれた柴崎村絵図（立川市歴史民俗資料館蔵）を見ると、現在の富士塚公園の位置と思われる場所に山型の地形がはっきりと描かれています（立川市史編さん近世部会編『鈴木家文書目録』の口絵参照、2018年刊行）。比較的新しいものでは、昭和5年の「最新実測立川町全図」にも同様の塚状地形を、更には昭和11年の「立川町全図」で地形とともに「富士塚」と

いう名称も確認することができます（立川市史編さん近代部会／立川市史編さん現代部会編『新編立川市史 資料編 地図・絵図』、2019年刊行）。これらの資料から、明治42年以前に浅間神社があったこと、現在の富士塚公園の位置に享和4年時点で富士塚とみられるものが存在していたことが分かります（写真5）。

以上のように民俗の調査は、フィールドワークによる段階的かつ多方面への調査を行い、特定の民俗（ここでは富士塚や浅間神社）の全体像へアプローチしながら、ライブラリーワークによって、その歴史や移り変わりを捉えようとするもののなのです。



写真5 享和4年（1804）柴崎村絵図（歴史民俗資料館蔵）

### 4. 成果の検討・位置づけへ

最後の段階では、フィールドワークとライブラリーワークで得た資料を、これまでに明らかにされている知見と突き合わせて検討します。

富士山を登拝する信仰習俗は江戸時代中頃から後期にかけて盛んに行われ、各地で富士講と称する組織が作られました。富士塚は、住まいの近隣に、富士山を模して人工的に塚を築き、直接富士山へ赴くことができない人でも登拝できるようにしたものです。



表1 新編武蔵風土記稿の多摩郡内の浅間神社

| 旧村名         | 社名     | 神社概要                          |
|-------------|--------|-------------------------------|
| 高ヶ坂村（町田市）   | 浅間社    | わづかなる社なり 例祭は六月朔日 大蔵院の持        |
| 屋敷分村（府中市）   | 富士浅間社  | 小社 社地塚の如く平地より築出す 村内の鎮守 例祭九月九日 |
| 人見村（府中市）    | 浅間社    | 小社 堂山の丘上にあり 例祭六月六日            |
| 松木村（八王子市）   | 浅間社    | 山上にあり 社あるを以て此辺を富士森と字す         |
| 落合村（多摩市）    | 古塚 富士塚 | たかさ九尺                         |
| 御所水村（八王子市）  | 浅間社    | 塚あり 大久保石見守が勧請せしと云 村の鎮守 例祭六月朔日 |
| 散田村（八王子市）   | 富士浅間社  | 元和年中棟札あり 別当新義真言宗正覚院           |
| 原宿（八王子市）    | 浅間社    |                               |
| 同（八王子市）     | 浅間社    | 高き所にあり 石の小社                   |
| 小仏宿（青梅市）    | 浅間社    | 小社 安永年中野火の為に焼亡                |
| 上恩方村（八王子市）  | 浅間社    | 案下峠の絶頂 僅の石祠 本山派修験東福院持         |
| 戸吹村（八王子市）   | 富士浅間社  | 山上にあり 別当浅間坊                   |
| 油平村（秋川市）    | 富士浅間社  | 小社 寛延の棟札 村民の持                 |
| 平井村（日の出町）   | 浅間社    | 山上にあり 日輪寺持                    |
| 大久野村（日の出町）  | 浅間社    | 小祠 棟札に「明応九年中興」 毎年六月十五日例祭 神職持  |
| 御嶽村（青梅市）    | 富士浅間社  | 富士峯と云処にあり 小社 源頼朝建立と云 例祭四月初申   |
| 原村（奥多摩町）    | 浅間社    | わづかなる社 村民持                    |
| 拝島村（昭島市）    | 浅間社    | 小祠 近來のもの 富士峯に擬して築ける山 高さ三丈     |
| 大澤村（八王子市）   | 富士浅間社  | 富士浅間社 小社 山上にあり 曹洞宗龍源寺持        |
| 箱根ヶ崎村（瑞穂町）  | 浅間社    | 山上にあり                         |
| 落合村（新宿区）    | 浅間社    | 鎮守 例祭三月十五日 村民持                |
| 上高井戸宿（杉並区）  | 浅間社    |                               |
| 榎木戸新田（国分寺市） | 浅間社    | 小祠 源蔵持                        |
| 日野本郷新田（日野市） | 富士浅間社  | 塚あり 小祠 村民持                    |

富士塚というと、このような江戸中期以降に流行したものが有名ですが、富士見町の富士塚はそれ以前からあった富士信仰に基づいているようなのです。

江戸時代の文政年間（1818～1830）にまとめられた地誌『新編武蔵風土記稿』を参照すると、多摩郡においても、24もの多くの浅間神社が認められます。そこに富士見町の浅間神社の記載はありませんが、いずれも山や塚などの小高い地に存在していたこと、中には比較的新しい造立のものがありますが、江戸時代の流行以前から存在していたと考えられる例も少なくないことが分かります（表1）。この点からは、富士信仰を、江戸期に流行した富士講にのみ結びつけて理解することが困難であることが窺えます。実際、富士見町の富士塚には、富士講の伝承は伝えられず、記録も発見されていません。このことから考えると、富士見町の富士塚は、富士講が流行する以前から信仰されていた例の1つであると考えられそうです。

それでは、当地における富士山とは、生活上、どのような存在であったのでしょうか？富士見町の山中、滝ノ上周辺の旧家においては、かつて「富士向き」と称して、富士山に向かって民家が建てられていたという話も耳にします。聞き書きによって、このような生活の中に息づく富士山との関わりが浮かび上がって来るのです。そもそも、富士見町は、富士山が良く見えることで付けられた町名です。富士山を尊ぶ営みや考えが長い歴史を持って、今日に繋がっているのではないのでしょうか。

## 5. おわりに

以上、富士見町一丁目の富士塚を例に、民俗の調査とその成果の位置づけについてご紹介しました。民俗・地誌部会では、このようにして、地域社会の生活文化を総合的に捉え、『立川市史』へ編さんしていくことを目指しています。民俗・地誌部会の調査は、市民の方々のご協力によって支えられています。今後とも、ご支援を下さいますよう、よろしくお願いいたします。

本稿は、民俗・地誌部会の部会員である榎本直樹、中野泰によって収集された資料、及び、草稿を元に、囑託藤野哲寛が執筆したものです。